

ブラームス / 交響曲第4番 ホ短調 Op.98

本日冒頭の「ハイドンの主題による変奏曲」をはじめとする管弦楽作品を通して地道にオーケストレーションの技術を磨いてきたブラームスは、ついに1876年、念願の「交響曲第1番」を書き上げる。40代に入ってようやく実を結んだ交響曲の創作はその後も順調に進み、1885年に最後の「交響曲第4番」が完成された。作曲は1884年と1885年の夏の休暇中に、ウィーンの南に位置する保養地、ミルツツーシュラクで進められた。初演は1885年10月、ドイツのマイニンゲンでブラームス自身の指揮で行われている。他の3つの交響曲もそうだが、「交響曲第4番」は、J.S. バッハの対位法、ハイドンやベートーヴェンの緻密な主題展開など、ブラームスが研究を重ねた古典の手法がいたるところで生かされている。第4楽章がバロック時代の変奏曲であるパッサカリアの形式で書かれていることは、とくに有名である。だが一方で、第1楽章冒頭の子題をはじめとして、旋律はなんとロマン主義的なことだろうか。旋律はもはや古典的な拍節構造のなかに収まりきれず滔々と歌われ、第4楽章でさえ、変奏の区切り目を忘れさせてしまうほど一つの雄大な音の流れを感じさせる。古典的な器からあふれ出るロマン主義的な精神こそ、ブラームスの音楽の大きな魅力といえよう。

第1楽章 アレグロ・ノン・トロppo、ホ短調：ヴァイオリンで始まる第1主題、ホルンとチェロで始まる第2主題が、自由なソナタ形式によって展開される。

第2楽章 アンダンテ・モデラート、ホ長調：ホルンで始まる冒頭主題には、教会旋法（フリギア）の香りがほのかに漂う。

第3楽章 アレグロ・ジョコーソ、ハ長調：ピッコロやトライアングルが加わり、晴れやかな気分が広がる。

第4楽章 アレグロ・エネルジーコ・エ・パッショナート、ホ短調：バロック時代の変奏曲の一種、パッサカリアの形式をとる。基本となる8小節の低音旋律は、J.S. バッハのカンタータから取られている。

遠山 菜穂美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成

フルート 2 (ピッコロ持ち替え 1)、オーボエ 2、クラリネット 2、ファゴット 2、
コントラ・ファゴット、ホルン 4、トランペット 2、トロンボーン 3、ティンパニ、
トライアングル、弦五部 ※スコア上の表記